

---

## 巻 頭 言

### オール東邦の力を東邦の看護にも

新しい年がスタートしました。昨年の言葉は、「絆」でしたが、3月の未曾有の大震災の後、日本中の人々が復興に向けて力を合わせて立ち上がる様子に、日本人の本来もっている大和心を感じ「絆」の大切さを痛感した年でした。

東邦看護学会も会員数が1600名を超え、12月には学術集会在盛會に開催され、絆を深めることができ、研究会の設立から11年目を向かえて東邦看護の未来を共有する仲間としての会員意識が芽生えてきていることを強く感じさせられます。今年はどのような年になるのか、いや、どのような年にするかは会員一人ひとりの学会に対する思いに委ねられています。東邦看護の実践を科学的根拠に基づいたものとして示していくためにも、学会の場を実践と近いものにしながら、さらに発展させていきたいものです。

さて、看護界の大きな動きの一つに「特定看護師制度」があり、国も看護協会も熱心に取り組み、国民の熱い視線が注がれています。思えば私たちが学生の時には、「医師と看護婦は医療の両輪であり、君たちは最高学府の高等教育を受けているのだ」といわれて育ったものでした。「看護は医師と両輪を組む専門職であり、お互いを尊重してよい医療を提供するための努力をしよう」というもので、他のパラメディカルに比較しても看護が最も医療に近く期待されていた様に思います。当時は若くて純粹だったこともあり、その言葉をそのまま受け取り大変誇らしく思ったものです。あれから30数年経ち看護大学が増え大学院教育もすすんでいますが、未だに看護師と医師との専門職としての隔たりは大きいものがあり、むしろ医療から看護は遠ざかっているようにさえ思われます。「特定看護師」が生まれてきた背景には、この様な現状から高度医療の部分も担える看護師を現場が望んでいることを物語っているともいえましょう。

医療チームとして医師と連携した仕事をする時には同じ目標を共有し、共通の言語をもつ必要があります。キュアする立場とケアする立場から、医学と看護学との違いはあっても、せめて専門性を追求する姿勢は同じでありたいものです。

今年は佐倉で本学術集会在開催されますが、オール東邦の力を東邦の看護にも反映できるように医学や理学、薬学と連携したチーム医療としての研究が推進できないものかと思っています。皆様の叡智と日頃のチーム医療を推進しているなかで、東邦ならではの看護学会らしく他職種とのコラボレーションなども取り入れた学会として大きく成長し発展していくことを期待しています。

平成24年3月吉日

東邦看護学会理事長  
齋藤 益子

(東邦大学医学部看護学科教授)

---